

## エビ

### 冷凍エビ輸入2ヵ月連続で前年上回る

貿易統計による冷凍エビ（その他のシュリンプ&プローン）は、今年に入り1、2月とも連続2ヵ月で前年を上回った。

記録的に減少した15年とは異なった状況。在庫が低水準で、昨年末から円高が進行していることが追い風となっている。1月の輸入量は前年比10.7%増で1万1160tが輸入された。2月も17%増の9260tだった。輸入単価は下落し、1月は16%安1147円（キロ当たり）となり、2月も12%安1338円だった。3月も同じ傾向が続いたと見られる。

1~2月は、端境期のつなぎ的な買い付けおよび国内販売だが、内販は悪くなかったようだ。大手商社は「1~3月販売は金額ベースで前年並みだが、数量は1割増で推移した。値頃感で数量

が伸びている」と語っている。

1月は業務用向けが健闘し、量販店は前年並みの感触で、2月は逆に量販店向けが良かった。基本的に業務用、量販店とも感触は良さそうだ。

#### タイはパッカーが自前加工

東南アジア産地での買い付けがこれから本格化するが、各国とも稚エビの成長は遅れている。

ベトナムでは降雨が少なく南部で干ばつとなり、エビ養殖に打撃を与えている。水揚げは5~6月に本格化するとされていたが、1ヵ月ほど遅れる見通し。インドは昨年末に現地相場が安くなり、養殖業者が稚エビの池入れを遅らせたため、本格水揚げは予想より

1~2ヵ月遅れ、6月頃になりそうだ。インドネシアは順調に生育している。

タイは過酷な労働環境への欧米からの批判が、漁船から加工業界へ広がった。エビの殻剥き加工は零細業者が行い、大手パッカーが買い上げるスタイルだった。この方式が批判を受けて昨年11月に禁止され、ほとんどのパッカーが自前で殻剥き作業をしている。これがコストアップにつながり、タイは競争力が弱まったとされる。

日本は昨年末までの買い付けで、今年前半分を確保しているとされ、水揚げ集中時にどう対応するか注目される。米国も昨年11~12月に記録的に買い付けたため、今年3月のボストンシーフードショーでの、東南アジア諸国との商談は不調だったとされる。欧州はテロ事件が外食不振につながり、買い意欲は弱いとされる。

## スリ身

### 洋上価格は昨年Aシーズンに戻す

今年のAシーズンスケソウスリ身価格に関する、日本と米国洋上スリ身業者との交渉が妥結し、昨年Aシーズン価格に戻すことになった。昨年Bシーズン比20~25円（キロ当たり）安くなる。

具体的にはSA級450円、FA級420円（一部業者430円）、A級380~390円、KA級345~355円、KB級325~335円となる。

#### 円高を背景に20~25円下げへ

円建て決済のスケソウスリ身価格は、円とドルとの為替レートの変動を考慮しないという不文律があった。しかし、3年ほどの長期におよぶ円安は、米国スリ身業者に不満をもたらし、昨年Bシーズンは一律20~25円アップで合意した経緯がある。

ところが昨年末からは、逆に円高基調になった。今度は米国が日本側に譲歩し、20~25円下げて1年前の水準に

戻した。30円以上の値下げが妥当とされたが、日本側が妥協したようだ。

一方、米国の大手陸上スリ身メーカーは、先に上級品は20円、下級品は10円アップすることで合意している。このため、今回の合意で陸上スリ身は中上級品が洋上スリ身に比べ、割高感が出ているとされる。

スケソウスリ身の15年Bシーズン物は4月中には消化され、16年Aシーズンものの販売が次に控える。大手練り製品メーカーは、3月からの値上げを表明したものの量販店からの反応は厳しく、中にはほとんどゼロ回答に近いものまであったと言われ

る。そうした厳しい環境の中にあって、スリ身価格が下がることは練り製品メーカーにとって安堵できる材料にはなる。

一方で、秋冬商戦での値上げを検討しているメーカーにとっては、マイナス材料となる懸念がある。練り製品業界は円安、円高に振り回されかねない。

15年のスケソウ輸入量は、前年比4.8%増の11万6500tだった。単価は20.8%アップの337円と急伸した。イトヨリスリ身は13.7%減の2万6630tで、単価は18.1%高の352円だった。

